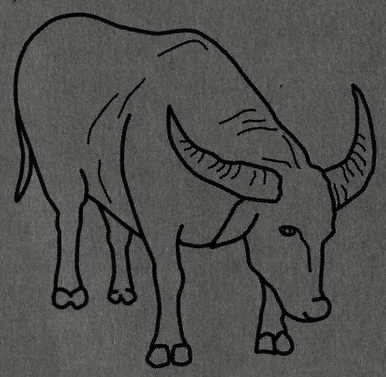
生きもの博物誌

【水牛】
ラオス



水牛の放し飼い

高井 康弘
（たかい やすひろ）

大谷大学教授

休閑地の利用

ラオス北部の農村で水牛について調べ始めたころのことである。水牛を多数飼っているというのに、その姿を見かけない。問うてみると、「パーに放している」と答える。「パー」は森や林や藪や野を意味する。ただし、「パー」ならどこでも良いわけではない。焼畑作後に休んで、まだ一、二年で、草や幼木だけの若い林野に、彼らは水牛を放す。休閑後四、五年経ち、木が高く茂る「年をとった林」になると、食べ物は無いので水牛は入らない。

農村の人びとのおもな生業は水田稲作である。しかし、彼らは周辺の山腹を焼き、陸稲や雑穀を作ってもいる。その後の休閑地が放し飼いの適地なのである。村人は、若い林野のなかでも、水牛の好物の笹などが群生し、かつ渓流など水場のある地点を選び、水牛を放す。水牛たちは数頭から十数頭程度の群れを作る。一〇歳前後の雌のリーダー水牛たちに率いられて、群れは渓流沿いの一定範囲を行き来する。

彼らは水牛を放すといっても、放置するわけではない。定期的に林野にわけ入り、様子を見に行く。水牛は用心深く、見知らぬ人が来ると藪に逃げる。しかし、飼い主が塩を携え訪ねると、向うから来る。その際、怪我の治療などの世話をする。数名の村人が同一地点に水牛を放している場合には、通常、交替で見に行く。年中、林野に水牛を放す村もあれば、雨季のみ林野に放し、乾季の稲刈り後は圃場（ほじょう）に移す村もある。水牛が圃場で草を食み、糞を落とすことで、除草や施肥の作業を省くことができる。

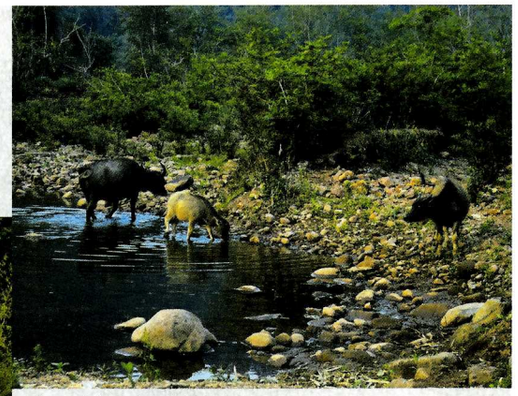
水牛が減る背景

ラオスでは水牛は多面的に利用されてきた。水田耕起などに使う役畜として、精霊を祀る際に供する血肉として、宴のご馳走の食材として、あるいは交換財として重宝されてきた。

しかし、近年、農村では水牛が減少している。放し飼いの適地の縮小がその一因である。一方で、保護森などに指定された区域では焼畑が禁止になり、若い林野が減っている。かたや、幹線道路に近い便利な低地や山腹で、隣国市場向けのトウモロコシ等換金作物の作付け地やゴムの園地が拡大している。

その結果、飼い主は水牛をこうした農地の近くに放さざるをえなくなっている。群れに見張りを付けたり、夜間は繋留（けいりゅう）したりして気を配るが、水牛が作物を食害し、弁償問題になるケースが多発している。そのため、農林業振興区域では放し飼い禁止の措置が採られつつある。行政の指導にしたがい、遠隔の放牧区域に水牛を放すか、常時繋ぎ置くことが、市場向けの農林業と両立するための方途である。しかし、事は円滑に進んでいない。農業や漁撈や薪採りなどさまざまな生業の合間に、水牛を飼ってきた村人にとって、飼料用の草刈りなどで時間と労力が取られる飼育方式への変更は、生活スタイル全体の変更を伴うからである。水牛を仲買人や屠畜（とちく）業者にすべて売ってしまう人が増えている。

ラオス北部の大小の街の生鮮市場では、豚肉とともに水牛肉が売られている。行商も農村を回る。かつては人びとは祭りなど稀な機会に、水牛を一頭、協働して屠畜し、宴で食するだけであったが、今では水牛肉を日常的に気軽に購入できるようになってきている。しかし、近郊農村の水牛は枯渇し始めている。近い将来、ラオスにおいても水牛に接した経験が無い子どもが増えそうである。



山間の渓流にあらわれた水牛

稲刈り後の圃場に放された水牛と見張る飼い主

犂を曳かせて棚田を耕す

水牛を屠畜解体する食肉販売業者たち

アジア水牛（学名：*Bubalus bubalis*）

いわゆる水牛にはアフリカ水牛、アジア水牛などがいるが、それぞれ、属や種が異なる。アジア水牛の大半はインド、中国、パキスタン、東南アジアで家畜として飼われている。約5,000年前にインドで家畜化されたといわれる。アジア水牛はインド等に分布する河川水牛と中国、東南アジアに分布する沼沢水牛に区分される。熱帯、亜熱帯の生きものだが、直射日光下での体温調節が苦手なため、昼間は藪中などの日陰や水中でじっとしている。